



Contents

- 「核兵器のない世界」にかける思い
- アメリカ・キューバ訪問
- 「保守本流」とは

# 政治家岸田文雄の「核兵器のない世界」にかける思い



国連本部で行われたNPT運用検討会議初日の一般討論演説

## 「保守本流とは」岸田文雄3月27日衆議院外務委員会答弁より

問：宏池会を含む保守本流とは、どのような政治理念なのか。

答(岸田国務大臣)：保守本流とはどのような政治なのかという御質問ですが、これはあくまでも私の考え方を申し上げさせていただくわけですが、そもそも保守本流という言葉、まあ最近あまり使われなくなりました。戦後の政治に関するさまざまな文献を見ておると、保守本流という言葉は、昭和三十年、保守合同が行われまして自民党が結党された際に、旧自由党系、吉田茂につながる人脈、この人の流れを保守本流と呼んでいたようでもあります。そして、この保守本流につながる人脈の方々が、政策的には、軽武装、あるいは経済重視、さらには積極財政、積極経済、こういった政策を打ち出してきて、こういった歴史があります。

ただ、私は常々思っているんですが、具体的にどのような経済政策を打ち出したかということだけに目をとられていては、この保守本流につながる人脈の本質が見えてこないのではないかと考えています。こうした人脈の体質、哲学がまずあった上で、こういった政策が打ち出されたというふうには思っています。

こういった保守本流と言われる人脈は、旧自由党の流れをくむということから、もともと、言論の自由とか表現の自由、この自由というものを重視した人脈でありました。よって、その後、リベラル勢力、自民党の中においてはリベラルと言われた人脈につながっていきます。

そして、もう一つ、この人脈の特徴としては、戦後政治の中であって、特定のイデオロギーとかあるいは概念にとられることなく、極めて現実的に、リアルに物を考えて、リアリズムに基づいて政策を打ち出した、こういった人脈であったと私は思っています。

当時の国際情勢の中で日本はどの立ち位置に立つべきなのか、当時の世界情勢の中で経済と安全保障のバランスをどうとすべきなのか、また、当時、本当に貧しい日本国の中で国民の生活を向上させるためには何を優先すべきなのか、これを極めてリアルに考えた上で、政策を打ち出した。その結果が、軽武装であったり、経済重視であったり、積極財政、積極経済であったのではないかなと思っています。

そして、あともう一つ加えるとしたならば、例えば、池田内閣のキャッチフレーズは「寛容と忍耐」でありました。そして、大平内閣のキャッチフレーズは「信頼と合意」でありました。物の決め方につきまして極めてコンセンサスを大事にする、権力の使い方にあっては謙虚でなければならない、こういった哲学を持っていた人脈ではないかと考えています。

最近では保守本流という言葉はあまり使われなくなりましたが、リベラル、あるいはリアルな政策提言、また謙虚な姿勢、こういった姿勢につきましては、私自身もこれからも大事にしていかなければならない大切な姿勢なのではないかと考えております。



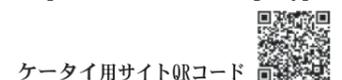
5月13日「宏池会と語る会」には3500名を超える多くの方々にご出席いただきました。ご出席・ご協力に感謝申し上げます。

〒730-0013 広島市中区八丁堀六十二番地  
自由民主党広島県第一選挙区支部 翔 編集室  
発行平成二十七年五月二十三日

### 岸田文雄後援会事務所

- 国会事務所  
〒100-8982 東京都千代田区永田町2-2-1  
衆議院第一議員会館1222号室  
TEL (03) 3508-7279 (直通) FAX (03) 3591-3118
- 広島事務所  
〒730-0013 広島市中区八丁堀6-3  
和光八丁堀ビル9階  
TEL (082) 228-2411 (代表) FAX (082) 223-7161

●岸田文雄ホームページ  
<http://www.kishida.gr.jp/>



ケータイ用サイトQRコード

### 岸田文雄プロフィール

昭和32年生まれ。早稲田大学法学部卒業後、㈱日本長期信用銀行等を経て、平成5年の衆議院議員総選挙において初当選。以後8期連続当選中。  
自民党青年局長・商工部会長・経理局長、建設政務次官・文部科学副大臣、衆議院厚生労働委員長などを歴任後、平成19年の第一次安倍改造内閣において内閣府特命担当大臣(沖縄担当など)で初入閣。初代消費者行政推進担当大臣として消費者庁新設の土台を作る。  
平成23～24年にかけて野党自民党において国会対策委員長として指揮をとり、与党に対して厳しい国会追及を行い、解散に追い込む。  
また24年には保守本流の政策集団である「宏池会」の会長に就任する。  
平成24年の衆議院総選挙後に発足した第二次安倍内閣において外務大臣として入閣、続く第二次安倍改造内閣・第三次安倍内閣でも引き続き再任され、現在戦後外務大臣の在任期間歴代10位という長さとなっている。

### 岸田文雄フェイスブック

<https://www.facebook.com/fkishida>

日々の活動写真を中心に更新しています



# 政治家岸田文雄の「核兵器のない世界」にかける思い

外務大臣岸田文雄は被爆地ヒロシマを地盤とする衆議院議員だ。原爆が投下されたその地が地元であり、それだけに核軍縮・不拡散問題にかける思いはどの政治家よりも強い。その被爆地選出である岸田文雄が、外務大臣としてこの問題にどう取り組んできたのかを追ってみた。(文・翔編集部)



2014年第8回NPT外相会合

広島県広島市の中心部から選出されている衆議院議員として、「核問題はライフワーク」と述べる外務大臣の岸田文雄は、その外相就任時からこの分野については特に力を入れてきた。

まず平成二十五年十月に日本としては初めてとなった、125カ国賛同による「核兵器の人道的結末に関する共同ステートメント」への署名が象徴的だ。この共同声明には「いかなる状況においても核兵器が二度と使用されないことが人類の生存そのものにとって利益である」と謳われており、ややもすれば「核の傘」の傘下である日本にとっては受け入れにくい内容だと言われてきた。事実、同様の過去三回の共同声

明に日本は賛同してこなかった。しかし第二次安倍内閣が発足し岸田文雄が外相に就任したことが、文言の調整を実現させ、歴史的とも言える賛同署名を成し得たと言えよう。以降、同様の声明に日本は引き続き署名を続けている。

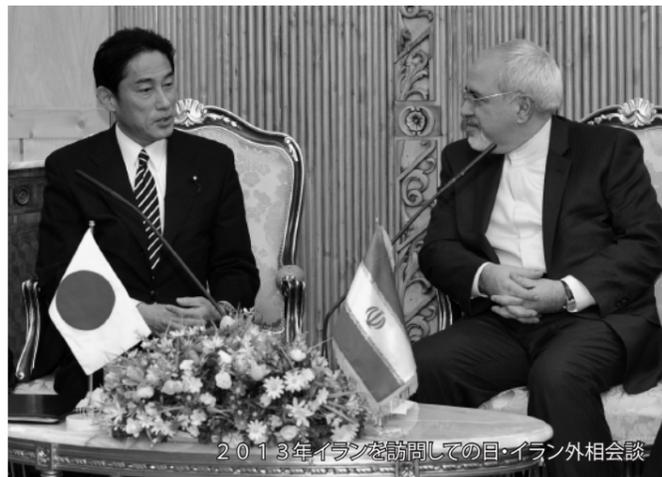
これらの方針は、一見「タカ派」と呼ばれる安倍総理の方針とは相反するように見られるかもしれない。しかし、安倍総理と同期で若い頃から政策論議を通じて気脈を通じてきた岸田文雄という政治家の存在あつてのこれらの外交方針だろう。自ら外交にも力を入れる安倍総理だが、岸田外務大臣だからその外交も確かにある。それは第二次安倍内閣が発足してから二年半も総理大臣と外務大臣が変わらず両輪として上手く機能してきたことが証明していると言えよう。

ため、各国首脳を被爆地に招いて現場を直接見て貰うためには、NPT I 広島開催は避けなくては通れないプロセスだったので、岸田文雄が外務大臣の時にこそ実現しなければならなかった課題とすら言えた。外務大臣として果たした岸田文雄の役割の歴史的な意義は、大変大きなものがあると言えるだろう。

また国際的な枠組みだけに限らず、岸田外相は二国間関係の場においても核問題を多々取り扱っている。例えばイランを訪問した際にはローハニ大統領を表敬し、包括的核実験禁止条約の批准、追加議定書の批准・実施を含むIAEAとの完全な協力等を提案し、またキューバを訪問した際にはカストロ前議長と会談し「核兵器廃絶への思いを共有した」と語っている。

広島という地名は核軍縮・不拡散問題にとって特別だ。たった一言「広島選出の外務大臣」と言うだけで相手の反応がまるで変わる

それが最もよくあらわれているのが、昨年四月の日本初開催である広島での「軍縮・不拡散イニシアチブ(NPDI)外相会合」ではないだろうか。「核のない世界」の実現のため、各国首脳を被爆地に招いて現場を直接見て貰うためには、NPT I 広島開催は避けなくては通れないプロセスだったので、岸田文雄が外務大臣の時にこそ実現しなければならなかった課題とすら言えた。外務大臣として果たした岸田文雄の役割の歴史的な意義は、大変大きなものがあると言えるだろう。



2013年イランを訪問しての目・イラン外相会談

の動きに批判的な向きもある。即時保有禁止条約を締結すべきだという国もある。しかし何事も理想論や結論だけを振りかざして結果が得られるものではない。それが政治や外交であれば尚更だ。事実、現実的に核を保有している国が参加しない形で保有禁止条約を結んでも意味はない。元々保有していない国に禁止条約があつたところで、核の現状は一步として進んでいない。そうではなく、実際に核を保有している国にも現実的な実効性のある非核化への道筋を付けることが、真に非核化への近道なのではないだろうか。

昨年十二月に開催された「核兵器の非人道性に関する国際会議」に、いわゆる核保有五大国のひとつであるアメリカとイギリスが揃って初めて参加するなど岸田文雄が外務大臣に就任してから以降、核軍縮・不拡散は確実に前進している。そして被爆国日本の歩みは着実に世界の非核化を前進させている。人によっては小さな前進に映るかもしれないが、それでも前に進んでいることは確かなのだ。

今年も広島・長崎への原爆投下から70年という節目の年に当たる。広島と日本が核廃絶に果たす役割は相当に大きいと言える。その中において岸田文雄にかかる期待は国の内外を問わず益々大きくなっていくだろう。核廃絶に向けた世界的な取り組みの中には、岸田文雄は間違いなく今後中心となつて活躍する人物なのである。

## アメリカ・キューバ訪問 4.26~5.4

4月26日~5月4日にかけて、岸田文雄はアメリカとキューバを訪問しました。特にキューバは日本の外務大臣としては初めての訪問です。

まずアメリカでは、日米安全保障協議委員会(「2+2」閣僚会合)が開催されました。この訪米に際しては、ケリー国務長官の私邸に招かれるなど、大きな歓迎を受けました。

またニューヨークにある国連本部において、NPT運用検討会議に出席し一般討論演説を行い、「核兵器のない世界」に向けた強い思いを訴えました。

キューバ訪問ではラウル・カストロ議長との会談、カプリサス閣僚評議会副議長との企業合同会談を行うなど多くの政府要人と会談し、またフィデル・カストロ前議長とも会談し、以前訪日し広島平和祈念公園を訪問したことに話が及ぶなど、様々な意味で大変有意義なキューバ訪問となりました。



NPTでの一般討論演説



NPT運用検討会議に際して中国新聞ジュニアライターインタビュー



ホセ・マルティン像献花式



日米2+2



ヒロシマ・ナガサキ・アピール集会



キューバのロドリゲス外相との会談



キューバのカプリサス閣僚評議会副議長との企業合同会談



1614年にキューバを訪問した支倉常長(伊達政宗家臣)の像



作家ヘミンクウェイの像がある「フロリディータ」